

和田開明  
定節  
編輯  
小説

春雨文庫

第七號

下



A416  
147

春雨文庫第七編卷之下

東京 和田定節著

○第廿七回

井戸端ぬどがたの會議くわいぎ議長ぎぎの鳶とびの喚こゑと川柳点せりふの戯あそびロー

て都會とくわいの町まちの裏長屋うらながやの情態じやうたいと穿うがち得えとると言いふべ

きをり然さらばああの地ちの同おなト京師きやうし在ありながり繁華はんかと

道みち一ひと片田舎梅かたぢやうばいの宮みやの町外まちがはれなまど猶なほ所々ところどころ裏長屋うらながや

も有ありけと朝あさと夕ゆふ辺べの特とくさうふ惣そうめち井戸いどの賑にぎ

ひくく水汲む釣瓶の櫛こし米炊手先と夫たり  
ふ動りしゆせど諸色の相場や世間話し入實の入る  
甲乙「まゝか米が騰貴とちやア無う此まア時候の  
宜のよ何とつゝ事ごらうぬく「オヤ」〜天氣のせ  
へで高く成さのぢやア無とサ長筋さぬの御人數と  
一「所ふか公家さぬが大勢長門へ往てお仕舞なさる  
と中山忠光さぬや大将ふ〜松本謙三郎ごの藤本  
鉄石ごのとつゝ人が大和の五條で戦争と始めその

春雨七下

騒ぎが濟とま〜平野次郎とつゝ人が但馬の生野で  
戦争さぬぎとまゆ漸くまゝ安ん〜と思ふと  
ま〜何ごり長州が騒〜いと言ふと夫ごらう兵糧  
ふまゝの心米が高く成さのぢつさ何よ由知らな  
此方人らへ宜迷惑なめのご縁エ「戦争とつゝ者  
男と女と寐てまゐるのぢと思つて居〜大違ひ切  
里張たりぢやア御免ごねエ然がま〜否な話〜有  
よ。ソレあの長筋さぬの此家老の福原越後とつゝ人



の僧正そうじょうが谷や宮本みやもと  
 義経よしかげとろり先生先生せんせい  
 ふ習あそびつ

さのどツさ

アノ夫おとこどうどう

強つよううつつささののどどねねへ

隣となりり裏うらの腕熊うでくまさんさんな

んんども喧嘩けんかか好まがうう



春  
雨  
七  
下  
三

其先生そのせんせいががちちよよにに教おし授えつつ宜よろししららるる負まるる氣きづづくくひひが

無なつつてて一いつ然ぜんがが其その清せい兵へい衛ゑととつつみみ且かつ那なよりよりかか内うち室むろさんさん

ののかか岩いわさんさんとと言いふふ方かたがが又また一いつだだんん上う手てどどととつつみみ評ひやうをを

んんどどヨヨ一いつオオヤヤママアア女にのの癖くせはは其その様さまはは強つよいいノノ一いつななアアはは

強つよいいののぢぢややアア無ないい心こころ往むかひひががササ一いつ夫おとこぢぢややアア程ほどがが能よつつてて

實じつがが有あるるののどど子こ一いつままアア其その様さまををめめののササ夫おとこががかかつつ且かつ那ながが

居いななくくるるりり東とう寺じのの別べつ荘じやうへへ引ひ込こままうう久ひさししくく成なるけけれれ

どど且かつ那なのの慈あま母ぼさんさんかかつつ且かつ那なのの妹いもうととと四よツツみみ成なる子ことと二ふた

ツもある子で養ひ旦那が牢わら出るのを待て居る  
とのみと実と感心なりのごとと私きの内の野呂助さ  
んでさく其か内室さんの所へ容子で見え往て来る  
度と誉るのぐア子 甲「真正な女ごとと云て私き達をか  
その様を者なかりの無移へ無ともく私きの一  
軒おのて隣りの別嬪と由覧な何かと能出来て何様  
を男でも楯がつけなひと言ふぢや無う 甲「オヤ彼の  
江戸わら来て居る御新造さぬごら 困女ごら訣らな

いと言ふ評をんの女う工へ段々聞て見ると彼の別  
嬪の新撰組とこのか頭の近藤とこの人の御新造で江戸  
か人よ知れなひ様と察と来て居るのごつさ夫と  
が何様と事と此間ふなり靴ぬぎの土間が廣い物  
ごら其中心へ大きな土竈と築とさせさご何と始  
める積りごら私き達ふやア些も解せなひ口へ  
み後へ焼芋屋とみ見しので無し然が何でも沢  
山物と煮るのごら若や躰の混布まきの卸し屋で

も始るのなる麩屋町のお店で営業やお開きは成ま  
でへ平な仕事も無かふ賣子よして貰ひたいの  
へ夫よりうまや不思議だと思ふのハ此節あり毎  
朝まのむん松魚節を搔やうな音が為るう彼家の  
下婢が使ひふ出の時途中で逢うか前の家でハ  
間が透がみガリ〜ガリ〜松魚節を搔やうな音  
を為せるが彼の何と〜聞えう矢張松魚節をわく  
のどと言えう子夫か其時入り口の土竈の口の聞

春雨七下五

たつ末ハ何と煮る為の知りあいの二三日前は  
そり大きなお金をお買ふ成〜話〜成やど  
何と決らなひ絲〜近藤〜のハ人が水性でも仕  
う捕へて金蒲ふ〜搔てある松魚節を煮つけ天窓  
わく嚙つて仕まつうとつ積りうらうワ子〜左様  
〜一ヶ所稻荷山から取て来て丸煮よ〜様  
所が出来る〜うらう絲〜  
甲丙  
〜アハ〜ア〜夫が私  
由食〜のワ〜此せのの様は合戦の話〜を聞〜女で

も氣きが強つよく成なて来きるわら男おとこを煮ゆて食くふらおな者ものの  
出で来きるらううヨ生あまでなら何様なんぢな女をんなでも食くふらわらぬ  
へへ其そのうちよもお前まへみんごらら大食おほくざらううへへお前まへ  
や除のぞて仕舞しまうらねへへへオオ騷さわくらいい話わで思おもひ出で出で  
とがとおおさんさんお前まへの所ところへ縫物ぬいものや洗濯せんたくや持もてお出での江え  
戸とかか来きと見廻みまわ組ぐみの劍術けんじゆの教授けうごうかかだだとと言いふ渡辺わたべ  
さんさんの此節このせうささのの来こなないい様やうぞぞ孫まごくくへへ吉太郎きちたろうさん  
りりエエ彼人あのひとの彼様あなたより優やさしくくののて女をんなよよしくくも可愛かわいららい

春雨七下六

く成なるらううと思おもふ様やうな顔かほで居ゐるら大層おほそう強つよいい  
おおと夫とづづくく程ほどの宜よろしいい言いて居ゐるらよ似合にあ合あせ戦合せんご  
が好このななめめで頃まへとと言いうう飛出とびだす氣きぞぞ見みへへて此間このまへ白しろ  
の筒袍つづろや洗濯せんたくよよりりてか出での時とき重おもそそううみみののや肌かわ  
着きふふくくづづわわくく夫との何なにででススと聞きくく鎖帷子さざりごぞぞとと言い  
たが彼様あなたな物ものや着きるらんで居ゐるら位くらいななづづかかと特とくんで往ゆ  
と洗濯せんたくののささくく取とりりよお出での間まへが無なと見みへへて夫とみ  
ままけけりの置おききささくくと夫と然しかりりんんぞぞかかと夫とででお在ゐ



の所へか届け申さうと言ふけれど夫ごと家へ出掛  
てお出が無から江戸や横濱の話しを聞たり又戯弄  
たりして遊ぶるが出来なぬゆゑなやと持て往て上  
むと宜と無理と留て置とのごア子へアレオアか前を  
んぞの氣樂ごヨ私きとちやア債屋さんが彼様よあ  
つこので願や釣上らして居るのみ移へ一それれで  
由近頃の江戸ツ子も大層上ツて来て中ふの氣の利  
い好男子が有けれど渡辺さん位おなのの少なりよ

めんでも成ツラけ此方へ呼附るやうよか為ヨ私き由  
急行の加勢と往わらへこんどお出があるよ知らせ  
るわい倍度お出ヨ玄氣者ごめら一所よ騒ふと何様  
よ面白いごらうへ夫ぢやア江戸お上ツと人で若  
い者ハ當然年寄ごさへ女よハツ掛らなぬ者の無の  
ごから渡辺さんも定めり何処りよ情婦と稱へて有  
るごらう移へ一私き由左様思つごから探りよ入れ  
て見ごら此方よの来ご其様る者の出来をヨ夫ご

かゝ私わたくしの家うちをんぞよ長ながく遊あそんで居ゐるのぢやねわか  
前まへ々何どう様ようう仕しやうと言いふ存ぞん心しんをのぞらうわア、レ左  
様よう肯かくの出い雲うんの問もん屋やで卸おろして呉くれなののぢや然さか  
前まへも知しつてお在ゐる横よこ町まちのお遊あそさんが且かつ那な々欲ほしが  
つて居ゐるかゝ彼あ穢けをお大人おとなのので世せ話わ々も  
宜よろと思おもひ渡わた辺へさんよ其その事こと々持もち掛かると自おの己のハ女おんなハ海うみ  
免めんぶ少すくし優やさしいるでも言いれると直ただよ熱あつくある性しやうど  
かゝ往むかはり首くびつとけ所ところが鬘まげツ節ぶしも見みえたくある程ほど

嵌かつて仕し舞まのつが些ち立たと投なり出でされ起き請こゆ誓ちか詞ごも  
紙かみ屑くず屋やの正ただ厄やく介けと成なて仕し舞まののごら逆さかも出で来き祓はら  
へ位くらいへなる色いろ氣けと食く氣けと断ことかて仕し舞まふと思おもひ蛸たこ  
薬やく師しさぬ願ねがひを食く氣け一ひと方かたと極ごくめる食くツる  
なる馬うまも履はめる草くさ鞋せでも白しろ人ひと捏ね移うつの炭すす圍いでも手て柄がら  
で届とどく親おや父ちちの小こ言ことでもおおささんの臂ひぢ劍けん突つでも投なり  
まるひなる食く積つりごなんのと胡こ麻まかし請こ附つけを  
かる男おとこが好よくつて程ほどが好よくつて優やさしくつて切きれ放はな

れが好くつて女の惚ろの解がある女が惚まば手  
出さな男の十人一人も無いと言ふのは渡辺さ  
ん半りのお遊さん程な女が旦那は迷つて居ると言  
ても耳へ入れお刺軽とさなかり話し少しも相手よ  
な多るいのサ夫がうら合宿をきつてお在の吉沢さ  
んが縫いのサ持てよ来し時間て見ると横濱は深く  
言ひ交しと女が有て其寫真を食は隠し持て居るお  
ら或日酒は酔て眠り込んで所を附とそ徐と出して

見て遣う実よ彼の寫真の通りな好女サと涎を  
飲込をながうお話しがツツ夫がうら何程惚とツ  
て無多をのサ憎のぢやアないか移へアヤ百里餘の  
先よ一人ぶるお情掃が有のよ遠慮やして惚まば居  
らねる位なり真正は惚とのぢやアないか前由左様  
お遊さんよ取持て遣うとつめのか真正の氣をさ  
だう実の大指の目や忍んで自分が自分よ取めつて  
貫ひとのぢやう外の者の惚ろの繩張りよ寫真を

んぞのよきお言ひのござらうと釣瓶を握りて手と放  
し腋の下を搦れば此方の米か一桶をおき一アレ否ご  
よろと飛除とたん毎日来つめの油屋が油桶を擔ぎ  
油で四座の油を油の亘らう天秤棒のおとギシク  
キシ

○第二十八回

爰よまゝに近藤勇の妻お美弥の勇と共に京師へ入り  
住居を梅の宮の傍りよ求めて竊りよ此処よ居り勇

由勤の暇よの来り何事も睦まじく語り合ひ樂しき  
中よの有るりのあつ世の中追々騒がしく成り往  
勇の夫を鎮めんが為よ新よ募集されらる新撰組の  
頭なる故寸時由心の休まる間なくお美弥由これ残  
助くるの才機あれば同ト思ひよ苦しき去年の八  
月由長刃の人数塚町御門の守衛を免せられ七卿の  
方よ長人と共よ長門へ下向有りし時既に戦争よ  
由成らんらとの勢ひなりし故勇は美弥よ落往先

阿美弥が  
 深慮庭中  
 土竈ヤ  
 築



春二下十二

すて示しと漸くよして無きよ済之其後大和  
但馬常陸其他些々の戦争に在りしれども新撰組  
の京師を護るの任をれば他へ出張をなさざるを以  
て只都下の騷がしきや防ぎ居るの事あれば勇の  
折くお美弥の許へ来りしは此程に成り又京師大  
騷ぎとい成りたり其故に長刃の軍勢福原越後と大  
將とて進んで伏水に陣し續いて益田右工門介も  
兵を率ひ来り天王山に陣し國司信濃も又兵を率ひ

来り天龍寺は本營を構へしり因て近藤勇も隊下を  
率ひ備へし固めて其變動を窺ひ居るの折をればお  
美弥の許へ断て音信をとりしり然れどお美弥  
の此前より一の事ありし時の進退の聞き置しる故  
にみとせお只夫勇が戦場は働きの助けをせんよとて工  
夫し居しりし何思ひけん近辺に居る左官を頼み  
入口の土間廣らるるを以て側らの隅へ大いなり  
土竈を築立させ十分よ火の燃る様をとりしり他の

家できんざいの近在きんざいへ荷にををととび年とし寄よ子供こどもををどの其その処ところへ逃にげ  
まの彼かの処ところへ落おちまののととつつみ騒さわぎぎとと為なれれとともか美う弥やの  
夫おとこらら目めとと掛かぎぎ下げ女によののか鍋なべとと打うちむむらら一ひと軍ぐんがが始はじま  
ると言いて世よ間かんででののえんんら大おほ騒さわぎぎととままるるが吾われ侪たちの家うち  
よの年としよりよりの居おまま子供こどもののななし特とは此こゝ辺へんの場ばまま名な心こゝろ  
四方あつち近ぢか所ところが野のびびららのの何なによよも怖こゝろいいるるののなないいののさ  
何方どゝちへ逃にげややううととお好このまま次第しだいががアアね夫おとこががかからら女によの癖くせ  
よ悪わるく愁しゅうややおおいいくくととお思おもひひごごららううが彼かの様さまのの時ときよ

物ものをを買かひひと世よ間かんで捨すててるるよよ為なるるかかううと思おもひひ大おほききいいか  
金かねごごの荷にひひ桶かじごごの御膳籠ごぜんろうごごのの買かひひとと買かひひ買かひひ込こみ  
か折角せりやく買かひひここんんででも其そのか金かねをを掛かるる物ものが無なッッちちややアア誥ご  
ららををいいららうう土と竈ひをを築き立たせせるるののごごががままやや此こ様さまをを大おほ  
ききいいか金かねをを何なによよ遣つつつてて宜よろししうう給たまへへ且かつ那なが御ご覧らんよ成なり  
たたらら嚙かかか笑わらひひでで有あららううと思おもふふヨヨ一ひと然しかけけれれどども且かつ那なさ  
ままのの大おほききいいととごごか好このままでで住すまま居いるるかか焼やくくひひををささい  
ままままごごららうう夫おとこししてて此こ竈ひででのの味あじ噌そう豆まめででも煮ゆるるららか行ぎやう

水みづのか湯ゆでも沸わきよの十と分ぶつと存ぞんトオモ美ホニホおく  
まア夫おとこよ志こころても何なにる急いそよ用もち立たるるが有ありそうなも  
の。オヤ宜よろむと考かんへ出いし此こ方ちでの何なに様ようごら江え戸ど  
と夜よ少ち大おほきい火ひるる有あると其その火ひる場ばのままつりへ夜よ  
鷹たか蕎そば麦むぎくりぶの館あかかけ温う飢い屋やぶのが沢と山やま荷にと仕し込こ  
んで出でて往ゆき賣うり始はめるののごヨよ為なると火ひ事ことへ出いる人ひと  
が腹はらを空くしても食くふ物ものが無ないので困こまり食くふの夜よ鷹たか蕎そば  
麦むぎ屋やぶの館あかかけ温う飢い屋やへ来きて食くるる大おほ層そう賣うてお

春雨七下十四

金かねを儲たくわけると言いふ話わト夫おとこぶか長なが州しゅうと申ますの人ひとが  
合あ戦せんを初はめと二人ふたりでか辨べん當とうと拵こしらへ賣うるぢやアな  
いり并ならして其その儲たくわへか前まへと半はん分ぶんとけしと帯おびでもか  
揃そろひよ買かいぶぢやアなないりへアあレ貴あいい様ようと合あ戦せんの  
中なかでそんそんななりか出で来きませめりり子こ氣き樂らくなるるぢやアな  
新あらた御ご座ざをよ一ひと夫おとこハお前まへが知しらないあり左さ様よう思おもふの  
ごと言いうう吾われ信しんハ知しつつ居いる様ようが本ほんや何なにうう書か  
くあるのの見みると軍いくさぶと言いて講こう釈しやく師しのの話わををどどで



の無のぞヨ此京都の天子さぬが爲に居まて政事や  
取るか人の居る所をめで保元の軍平治の軍まて足  
利の御代での数限りも知れぬ程合戦が有とちあふ  
由應仁の乱と言て細川勝元とつみ人と山名宗全と  
つみ人と軍の両方とも都の中よ居て諸大名が二  
分れよなり何年も一戦つとのぞけれど京都の町  
がなかりありゆせむ夫が爲よ其土地よ住で居るもの  
が死でも仕舞いのたのぞか軍やど怖のりのため

春雨七下十

無らうと思ふヨ然けれども御所の繞りごの閑白さ  
まめ近所ごのま二条のか城守護職のか屋しき所  
司代のか屋しきの程近や國くへ出海道まぢみ掛つ  
て居るところの合戦場よ成らなるとも言れぬ故大  
膽ま言て居られなると此辺の街道まぢよあ  
まの無辺鄙軍が始まるとも鉄砲の音や耳より放  
火の煙りや見て居るをかり怖のては些も無のぞか  
ら其時辨當ま拵らきて賣と軍よ追れ腹や空一述て

来る人が多おほいので能よ賣うれ火事場のままりりの夜鷹よこたけ蕎そば  
 麦むぎどころでい無ないと思おもふヨ然ぶから年へん當とう屋や遣やて見み  
 やうぢゆ々まあまのうま前まへより吾わが儕しの方かたが沢山さかをま  
 くヨ。オホあ~~~~あ成なれど昔むかしの軍いくさのお話はなしがまお耳みみ申まう  
 して見みままと軍人いくさどうどうの格別くわくべつ町の者ものや女子よめども  
 が故ゆゑなく殺ころされしり家いえ々々が食くちちあありての仕舞しひ  
 ませぬ様ようざざららお作あそ通とり并な當屋とうや遊あそびびして御覧ごらんな  
 さいさいる私わたしのこゝろ煮に深この蒟蒻こんじやうや煮につけつける役やくは成なませ



鉄砲てつぱうの音おとや何なに々々  
 恐おそろろ~~~~  
 つんブルつんぶるく  
 震ふるへませ  
 うわうわらら  
 美みぞ  
 へ然ぜんけれ  
 ど私わたし  
 しし~~~~

其場そのばも成なりくく矢張やちやう葑蕀ふしの煮ゆかかよ成なりるるののぶぶららううと  
 思おもふふヨヨ今いまツツかか小こ看かん板ばんヤヤ出でししてておお置置きななさいさいナナ御おん弁べん  
 當とう軍ぐんををトトままりり次じ弟てい賣う出でしし仕し取ととと書かききててハハわわんんよよ其その位ゐ  
 なな膽たん力りきどどとと屹き度どおお金かねをを儲たくわけけるるけけれれどど給たまへへ真ま正せいよよ  
 年ねん當とうやや成なりささるるののなな御おん煮ゆ深ふかのの種たねをを早はやくく買かいいここんんでで  
 置おなないいとと往ままますすいい先さき刻ときおお遣つかひひよよ出でしし時とき荷に物ものをを車くるま  
 積つぐぐりり擔かついいごごりりとと田いな舎やのの方ほうへへ逃のがてて参まゐるるののののヤヤ  
 大だい層そう見みかかけけまま今いまよよもも招まねかかるるのの知しれれまませせ  
 春はる雨あめ七しち下げ十じゅう七しち

んんワワ然ぜんわわららままアア精せい出でししてて松しょう魚ぎょ節せつをを搔かくくおお兵べいよよおお  
 米こめのの搗き揚あげたたのの幸さいひひ何なん儀ぎもも買かいい込こんんどど鷲じゆ油あぶらもも買かいい込こんん  
 んんだだわわらら沢たく山さんああるる竹たけのの波なみもも上うへ草くさ履づきをを造つくららせせ一いつ生せいああ  
 るる程ほどつつんんでで置おくくとと思おもひひ取とりりよよせせととままるるかかららトト言い  
 ひひああひひ少せう考こうええ彼かのの月つき々々瀬せわわらら来きしし梅うめ干ぼしのの物もの置おけけてて  
 入いららししけけりり給たまへへハハいい彼かのの塵ちりもも成なりららないない大だい丈ぢやう夫ぶなな  
 ととららりりへへ仕し舞ますすハハ夫ぶででハハトトああのの薪まきももままどど沢たく山さん  
 有あららしし給たまへへ三さん日にち四よっ日にちのの燃もゆゆけけはは為なすすもも無なききなりなり  
 美み

の致しせん然ごとアノ松魚節まついしほハ此間このまはらツカつ何本なんぼん搦なま  
ししらら崩入おろららむむののお引出ひきだししも何も塞ふさり誠まこと入いれれの  
は困こまりりままままかか夫それより切きりり私わたくしがが煮方なな  
り弱よわととりりのの様ような物ものを些ち仕入つかいれてお置おきななさいさいま  
ししななへへままも左様さようが松魚節まついしほををかかりりハ急きゆうに搦なる物もの  
だだらら入物いれものが無なれれババ筆筒ひしきの引出ひきだしし明あて入いるるかか  
思おもわれれ沢山さわ搦なてお呉くれお前まへも食たべべせせ吾わが済さいも食たべべるる  
出いして働はたらくくかかつつササへ江え戸どでいいどどううで御座ございまする

春雨七下十八

此方こちらら賣うかか煮深なの味淋あじと砂糖さとうと醬油しょうゆを入いるるはは不  
り松魚節まついしほの遣つかいいののなないいららと思おもひひすすままワワとと言いれてお美み  
弥やハ口くち隠かくりりが左様さよう写うつて見みると江え戸どでも幕まくの内うち  
の煮深などどハ味淋あじででおおわりわり味あじを附つて有ありりと思おもふ  
ヨ然ごとけれれど此方こちで持もつつるる并な當あたりりハ松魚節まついしほを思おもわれ入い  
れ味淋あじををおお廢たししのの新製しんせいと仕様しやうがが中なかかないいらら貴き漬づけ  
ががおお氣きののおお強つよいいので私わたくしがが強つよくくなりり合戦いくさの初はつま  
るるぞ待まち人ひとの迹あとるるよよも構かまへへま握飯おむぎをを持もつつららお煮深な

や煮<sup>よ</sup>うりま<sup>つ</sup>る積<sup>つ</sup>りで<sup>い</sup>の座<sup>ざ</sup>い<sup>ま</sup>まが怖<sup>こ</sup>さ<sup>や</sup>耐<sup>た</sup>つて  
 働<sup>た</sup>く<sup>ま</sup>が出来<sup>でき</sup>ませ<sup>う</sup>り其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>は成<sup>な</sup>て見<sup>み</sup>な<sup>け</sup>き<sup>ば</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>  
 によ何<sup>なに</sup>ぶ<sup>ら</sup>分<sup>ぶん</sup>り<sup>ま</sup>せん<sup>ワ</sup>「オホ<sup>お</sup>い<sup>い</sup>開<sup>ひ</sup>き<sup>や</sup>吾<sup>われ</sup>侪<sup>ら</sup>不<sup>ふ</sup>  
 ぶつて耐<sup>た</sup>へ<sup>ら</sup>れ<sup>る</sup>耐<sup>た</sup>へ<sup>ら</sup>れ<sup>る</sup>の知<sup>し</sup>れ<sup>な</sup>い<sup>の</sup>サ<sup>ら</sup>然<sup>ら</sup>  
 か<sup>ら</sup>餘<sup>あ</sup>まり<sup>の</sup>怖<sup>こ</sup>く<sup>成</sup>ら<sup>る</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>彼</sup>も<sup>投</sup>り<sup>出</sup>し<sup>て</sup>逃<sup>に</sup>げ<sup>て</sup>仕<sup>し</sup>  
 舞<sup>ま</sup>う<sup>ワ</sup>子<sup>こ</sup>「オ<sup>お</sup>ヤ<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>ア<sup>あ</sup>様<sup>やう</sup>い<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>安<sup>あ</sup>心<sup>しん</sup>で<sup>座</sup>い<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
 ヨ。オホ<sup>お</sup>い<sup>い</sup>

春兩七下十九

とま<sup>ま</sup>る<sup>ら</sup>お梅<sup>うめ</sup>と吉<sup>きち</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>らう</sup>の成<sup>なり</sup>往<sup>む</sup>か<sup>岩</sup>が<sup>別</sup>荘<sup>じやう</sup>は<sup>困</sup>苦<sup>く</sup>  
 ま<sup>ま</sup>る<sup>ら</sup>等<sup>ら</sup>の<sup>つ</sup>り<sup>の</sup>猶<sup>なほ</sup>編<sup>へん</sup>や<sup>次</sup>ぎ<sup>あ</sup>ひ<sup>く</sup>は<sup>解</sup>分<sup>ぶん</sup>る<sup>や</sup>脚<sup>くわ</sup>  
 覧<sup>らん</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>と</sup>は<sup>希</sup>ふ<sup>ふ</sup>

東京書局出版 為田野村

東京市平足 京師園式工門加十三巻

味田 市

春兩文庫七編下之巻 終

明治十五年十月廿五日御届

編輯人

和田定節

下谷尾坂本町二丁目十四番地

東京府士族

京橋區弥左工門町十三番地

東京府平民

東京書肆出板人 武田傳右衛門

長野縣善光寺

小株屋

發賣書肆 西澤喜太郎

春兩七下二十

浪華史略

一名難波戰記

五編近刻出版

波多野英一先生著

小學用文填字法全冊

霞峯片桐先生書

葛飾為齋畫

花鳥山水 漫画早引

初編一冊 二編近刻

山々亭有人著

赤穂列女傳 全二冊

義士 孟齋芳虎画

彰義隊大野八郎遺稿

上野戰爭記

半紙本 全二冊

鮮齋永曜画

松村春輔編輯

近世櫻田記聞

半紙本 全七冊

月岡芳年画

彌左工門町十三番地

東京書肆 文永堂 武田傳右衛門

010190509554

